

---

# 神魔国物語

夢咲白憧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神魔国物語

### 【コード】

N8463M

### 【作者名】

夢咲白憧

### 【あらすじ】

神魔国<sup>シンマコク</sup>…神と魔族が共存する国。ある戦によってひとつの神里が滅んだ。この物語はその里とそれに関わるモノの物語。

一度死んだ里（前書き）

途中何度か修正等するかもしれませんがその時は、

その都度ご迷惑おかけします><

ちゃんとした？こういうファンタジーなお話書くのは初めてなので、

醜い点多々あるかとございますが、

下手くそなりにがんばって更新していきたいと思います。

もしよろしければ最後までお付き合いくだされば幸いです。

ではご覧くださいm（）——（）m

## 一度死んだ里

この世界には、いくつかの神の里がある。

そして…

長い間、我里と行われていた戦争が終わりを告げる。  
我主が死んだことによって、我々の里は滅び去る…

それから数日が経つ。

その里の生き残った、僅か数人で、里の復旧作業が行われる。  
そして、更に数日経つ。

死んだはずの里が、もう一度、少しずつ息の根を吹き返していく。

死んだはずの里が蘇る…

その情報は少しずつ、他の神里にも知れ渡って行く。

「白生様！」  
ハクイ

「どうしたの？そんなに慌てて??」

男が血相変えて現れる。

「これが落ち着いていられるものですか」

「だからなに？」

「こんな屈辱なことはない…」

「屈辱？」

「我里戦で負けたからといって、他の里の奴ら、我々の事を悪や魔族などと…」

白生はそっと微笑む。

「勝った者が正義なら、負けた者は悪で魔族か…」

「白生様……」

「まあ……正論ではあるね？」

「ですが……こんなの私は納得いきません。我里は伝統ある神里です」  
「ふふふ」

白生は笑う。

「白生様？」

「面白い……」

「え？」

「上等じゃない……奴らの言葉に耳を傾け、悪者（魔族）にでもなっ  
てみる？」

「どういうことですか？」

「白蛇（ハクジャ）里（ハクジャ）の名は捨て、神の名も捨てる」

「え！？」

「今から我里は魔喇（マラ）と名を変え、新たな里に作り変える」  
「ですが、それは今までの我里の歴史や伝統、先代達を汚すことに

……」

「ツバキ 椿、勘違いするな？」

「は？」

「確かに、滅んだ里の残された者が出来ることは、それ等の意思を  
受け継ぐことだ」

「ですから……」

「ただし、我々のやり方でね？今の歴史を作るのは先代ではない。  
我々だ！……違うか？」

「……おっしゃる通りです。しかし何も自ら悪（魔族）にならなくて  
も……」

「正義や悪なんて小さな問題よ……」

「え？」

「そんなこと誰かが決めることじゃない」  
「……」

「そもそも、神や魔族なんてモノ、最初からこの世に存在しないのよ?。」

「どういうこと?。」

「皆所詮、同じ肉の塊よ。種族に拘るのはただ、他とは違う何かを求めているからか?。」

「種族が違えど、皆同じ生き物だと?そういうことですか?。」

「そう。だからこそ、悪(魔族)の中にだって正義がある?。」

「悪の中の正義?。」

「椿、覚えといて?種族の違いに、隔てなんてないってことを?。」

「だから、種族の違いなんて、それほど重要じゃない。」

「?。」

「それより、これから、我々が何をするか?それが重要なんじゃない?。」

「白生様?。」

「白蛇の名を捨て、新たな命(里)として生まれ変わる。」

「?。」

「そして、その中で自分達の正義を貫く?我々の歴史は、我々で作る!。」

「はい!。」

## 魔喇の里

数日後、里の復旧作業は他の者に任せて、白生は一人、里外へ出ていた。

戦によって多くの仲間を失った為、

新たな仲間（戦力）を求めて旅だったのだ。

それからまた、数ヶ月の月日が流れ、白生が帰宅する。

「白生様が里外から戻られたぞ」

「白生様」

数人の里の者が、帰宅した白生を向かい入れる。

「白生様！」

向こうから白生を呼ぶ声がある。

「…椿か？」

「はい。長旅お疲れ様でした」

「椿も、留守の間、苦勞を掛けたね？」

「いえ、とんでもありません」

白生は里の中を見渡す。

そして、少し微笑んで言う。

「アリガトウ…お陰で大分、復旧したみたいね…」

「里の皆が頑張ったからです」

「そうね…」

白生は嬉しそうにそう言う。

「あの…」

椿は不思議な顔をする。

「…なに？」

「……その子は？」

「ああ……」

椿が見つめた先には、

白生の服の裾をギョツツと掴んでいる、小さな女の子がいた。

「…雪の里で拾った」

「雪の里？…あの神魔シンマの堺サカイのですか！？」

白生は軽く頷いた。

魔喇の里のような例外もいくつかあるが、

神魔国の中には『神界』と『魔界』という、

二つの大きな土地がある。

『神界』には『神族』

『魔界』には『魔族』

とそれぞれ純粋な種族がその地を治めている。

その他にもいくつかも土地がある。

その中でも、これら二つの種族は、太古から敵対している。

神魔の堺とはそれ等の土地との境界線のこと。

「どうやら雪里も最近、戦で負けたらしい……」

「戦？……」

「…まあ、一方的なものだった、みたいだけどね」

「それは魔族に？」

白生は頷く。

「元々、あそこの里はそんなに戦力の強い里ではなかったしね……」

「そうですか…ではこの子はその戦の……」

「生き残りよ」

「…名は？」

「璃鈴リリン…最も、私が勝手に付けたんだけど……」

「え？」

「相当ショックだったみたいね？戦の恐怖は覚えていても、自分の名前も忘れるくらいにね…」

「…そうですね」

「今日から我里の一味として向い入れる」

「わかりました」

「この子は、この先のこの里の星となる…」

そう呟き、白生はリリンの頭をそっと撫でる。

数日後：

「白生様？」

「どうしたの？」

「それが、里の外に数人の女性群が来ており、

白生様にお会いしたいと…」

「女性群？」

「ええ。それで、

その内の一人が白生様に『奏森』と伝えれば分かると…」

「そう…」

白生は軽く笑みを浮かばせる。

『来たか』

「白生様？」

「それ等は、私の客だ。里内への入りを許可する。

今すぐここへお通しして？」

「わかりました」

そう言うと、椿は少し頭を下げ、女性群の元へ向かう。

「コンコン」

「白生様、お連れしました」

「入って？」

「はい。失礼します」

「ガチャッ」

ドアが開き、数人の女性群と椿が入ってくる。  
そしてその内の一人が前に出る。

「お久しぶりです」

「奏森、良く来てくれた。今一度、お礼申し渡す」

白生がその女性に軽く礼をする。

「いえ、我々は貴女に忠誠を誓う者。お安いご用ですわ  
そう言くと女性は白生に深々とお辞儀をする。

「……アリガトウ」

「白生様…彼女等はいったい?…」

椿がそう聞くと、白生は少し嬉しそうに答えた。

「古い友人(同志)みたいなものよ」

それを聞き、女性が申し訳なさそうに答える。

「…いえ、そんな大層なものではございません」

「そんな悲しい事言わないですよ?」

「そんな…友人(同志)なんて、勿体無いお言葉ですわ  
女性は少し戸惑いながら言う。

「私にとって貴女は恩人であり、心の拠り所なんです  
女性は軽く微笑み、そう言った。

「それこそ、そんな大層なもんじゃない…」

「そんなことありませんよ?…しかし、数ヶ月前、

白生さんが、突然我里に訪れた時は、正直驚きました」

「ふふ」

白生は笑みを浮かばせる。

数ヶ月前。

白生はある里へ訪れていた。

それが、響オトの里。

この里は最近できた里で、里には女性しかない。

白生がその里に入ろうとしたとき、

「止まりなさい！」

見張りの女が白生に声を掛ける。

白生は女の言う通り、その場へ止まる。

「許可なき者は里に入れるわけにはなりません。ご用件は？」

「この里の主<sup>ウ</sup>に用がある」

「長に!？」

白生はそつと微笑みながら軽く頷いた。

「…何者だ!？」

「我名は月夜美ツキヨミハクイ白生。

主に『白生』が来た<sup>ウ</sup>と伝えてほしい…そうすれば分かる…」

「…しばしお待ち下さい」

そう言つて女は里内部へ白鳩便を送る。

しばらくすると、内部から連絡が来る。

「お待ちせしました…長から里内への入国の許可が来ました」

「そう…」

「こちらへ…長の所にご案内します」

女は白生をある部屋へと案内する。

「ここですばし、お待ち下さい」

そう言つと女はお辞儀をし、部屋を後にした。

そしてしばらくすると再び扉が開き、  
響の里の領主が中へ入って行く。

「ご無沙汰しております。白生さん…」

女性は頭を下る。

そして笑みを浮かばせながら言う。

「以前お会いしてから、どれくらい経つのでしょうか？」

「…陽の里で会って以来だから、一年と少しか…」

「そうですね…まだあれから一年ほどしか経ってないのですね」

「この一年でここは見違えたね？以前、ここには何もなかった…  
警備の指導や里の管理も良く出来ている」

「お陰さまで」

女性は軽く礼をする。

「陽と云えば…」

この間の戦で白蛇は、あそこに負けたそうですね？…」

「…そうですね…だけど…」

「？」

「まだ死んでない…」

「…」

「白蛇は負けた。先代も死んだ。」

「だけど、我里はまだ死んでない。…我々が生きている」

「風の噂で聞きました。」

死んだはずの白蛇シロヘビが息の根を吹き返したと…」

「今は白生さんが蛇の首を支えているのですか？」

「私じゃない。生き残った者皆でだ…」

「でもその上に立っているのはやはり貴女でしょ？」

「…建前上ではね」

「建前？」

「…」

「白生さん？」

「…正直不安なんだ。」

あの人（先代）の上に立つのが…私にそんな力があるのか…」

「…」

「だから私は、ここに来た…奏森（響里）の力を貸してほしい…」  
女性は少し笑う。

「？」

そして笑みを浮かばせ言う。

「私は貴女が里を支える力（要素）は、十分にあると思いますか？」

「奏森…」

「それでも、我手が必要ならば、

どうぞ、この手、貴女に差し上げえましょう」

白生は女性に頭を下げる。

「…アリガトウ」

「響の里との協力…」

椿が少し驚いたように言う。

「そうよ。今のままでは我々はいずれ滅びさる…そうなる前に、  
出来る限りの手を打つときたい。里の為に…」

「白生様…」

「そう言えば自己紹介がまだでしたね？」

女性が椿に言う。

「私は、現在、響の里を統治しております。」

カナモリマイ  
奏森舞と申します。以後、お見知りおきを…」

「ご丁寧にも、白生様（この里）の補佐をしております。」

ミナツキツバキ  
水無月椿と云います」

「…お互いあいさつは終わったな？」

白生は立ち上がり言う。

「今こそ蛇が脱皮する時…」

我里は響里と手を結び、今一度白蛇に息の根を吹き返す。  
そして新たに、魔喇という一つの命（里）を生み出す！」

他の里に比べると戦力はまだまだだが劣るが、  
此処に新たな里、『魔喇』が誕生する。

## 籠の里

「白生様。これからどうしましょう?」  
椿が白生に尋ねる。

「皆は、引き続き里の復旧作業を行ってほしい」

「わかりました」

「私は再び里外へ出る」

「また里外へ!？」

椿が少し驚いたように言う。

「…どこか行く宛てがあつて?」

奏森が聞くと白生は軽く頷き、話を続ける。

「籠カゴの里に行こうと思う…」

「籠の里?…あそこは確か…」

白生は頷く。

「別名…孤児の里…」

「孤児の里!？」

椿が聞く。

「あそこは種族は関係なく、

親や里に捨てられた子を各国から引き取り、

預かり、育てていると聞きます」

奏森が答える。

「そんな里が…」

「まあ、それも今では上辺だけみたいだけどね?」

「どういうことですか?」

「引き取り、育てると言えば聞こえがいいが、

実際は殆ど放置に過ぎない…」

白生が答える。

「それは、私も聞いたことがあります。」

なので、あの里の孤児はもう数えるほどしかないとか…」

「そうなんですか？」

椿が少し驚いたように言う。

奏森は頷き話を続ける。

「先代の真里亜<sup>マリア</sup>が生きていた頃は、そんなことはなかったのですが…」

「真里亜？」

「数年前までは真里亜という一人の女性を中心に、複数の娘で、その里を支えていた…」

「ええ。真里亜は里の皆に慕われていて、良き領主だったと聞きます」

「元々『籠』という里の名も、子供の揺り籠を指しているらしい」「揺り籠ですか」

椿がそう言うと、白生は頷き話を続けた。

「真里亜はホントに子供好きでね、当時その里にいた孤児に、一人残らず愛を注いだと云う」

「故に母のいない孤児にとっては、夢のような場所だったそうです」「それが、真里亜の死によって、

夢どころか、絶望の場所と変わってしまった」

「絶望？」

椿が不思議そうに言う。

白生が頷き答える。

「その里にとって真里亜の死はあまりに大きかったらしい」「…」  
「どういう意味ですか!？」

「つまり、それだけ、彼女の影響は大きかったのでしょうか…」

母を失い、その里にいた殆どの娘達は里を後にし、残った娘達だけで今の里を支えているそうです」

奏森が答える。

「残った娘もホンの僅か…片手で数えるほどらしい…」  
「そんなに少ないんですか？」  
…それじゃあ、孤児に対して殆ど何もできないのでは…  
だから、放置せざる、負えないのか…」  
椿の言葉に対して白生は頷く。

そして、そんな白生に椿はまた聞き返す。

「しかし白生様…なぜまた、そのような里へ？」

「新しい種を育てようと思ってね」

「新しい種？」

「この里の子供はもう殆どいない…あの戦のせいだね」

「女、子供にも容赦なしの戦でしたからね」

椿が少し悔しそうにそう言う。

「だからどうしても若い命が、今後必要となる…」

でないと、この里はいずれ崩壊する」

「なるほど…だから籠の里に…」

奏森が言う。白生はまた頷く。

そして椿が白生に聞く。

「いつ頃出発する予定で？」

「できるだけ早く…出来たら明日にでも…」

「明日ですか？それはまた急な…先日、」

里外から帰ってきたばかりなのですよ？

それなのにまた…もう少し先では駄目なのですか！？

我々には貴女様が必要なのです！」

椿が動揺したように言う。

「…」

白生は黙る。そんな中、

「わかりました」

奏森が静かにそう答えた。

「奏森様！？」

椿は驚いたように奏森を見る。

「でわ、我々はその新芽の為に新たな教育の場を持たせましょう」

「奏森……アリガトウ」

白生は少し微笑み奏森にそっと礼を言う。

「いえ、礼など必要ありません。

私達はもうこの里の住人……里の為に動くのは当然のこと……」

「奏森様……」

椿は奏森をみて、何かを決心したように言う。

「そうですね……白生様？わかりました。

里のことは我々にお任せください。

……次に貴女様がこの地を訪れた時、

今よりももつと素晴らしい里になっていることを、お約束します」

そう言つて椿は白生に深く頭を下げる。

「椿……忝い」

そう言い白生も椿に軽く頭を下げた。

「ところで白生様？」

「ン？」

「キララの方、

白生様が外出されている間、随分回復されましたよ？」

「それは本当か！？」

白生は嬉しそうに椿に聞き返す。

「ええ……ですから今度の旅には同行できますよ？」

「そうか……」

白生は笑みを見せながらそう返事をした。

## 旅立ち

魔喇の里。

次の日の早朝。

白生はリリンの部屋へ向かう。

「…ン！」

その頃リリンは夢の中にいた。

「リリン!？」

「…」

リリンは眠そうな顔で起き上がる。

そして白生に気づく。

「…白様!？」

眠そうな瞳が一気に冴える。

「おはよう」

白生がリリンに挨拶をする。

「おはようございます」

リリンは少し照れながら白生に挨拶をする。

それを見て白生は、微笑みながらリリンの頭を撫でる。

「朝早く起こしてゴメンね？」

リリンは首を横に降る。

「リリン?」

「…はい」

「私はこれから里を出るの…」

リリンは不思議そうな顔をして白生に聞く。

「白様どこかに行くの??」

白生は軽く頷き、話を続ける。

「ここにはしばらく帰れないかもしれない…」

「…」

「その間、リリンにはここにいて欲しいの」

「お留守番？」

白生は頷く。

「…」

リリンは寂しそうな顔をして俯く。

「だけでもし…」

「？」

「リリンが一緒に来たいと思ったら…」

それでもいいと思ってる…」

リリンは目を大きくさせて顔を上げる。

「どうする？」

「リリン…白様と一緒に居てもいいの？」

白生は笑みを浮かばせ、リリンの頭を撫でながら頷いた。

「だけど絶対に安全な旅とは言えない…それでもいいのなら…」

白生は少し不安そうな顔でそう言う。

しかしリリンは、目を更に大きくさせて言う。

「行く！リリン白様と一緒に行く！！」

そんなリリンを見て白生は言う。

「なら、出かける準備をしなさい？」

…一時間後には里を出るからね！？」

「…はい」

嬉しそうにリリンは返事をする。

それを見て白生は再び微笑み、部屋を出る。

陽の里。

「陽明様！」

男が一人駆け寄ってくる。

「どうした?」

陽明が男に聞く。

「白蛇のことです」

「白蛇?…噂では息を吹き替えしたそうだな?」

「はい」

「それで?…白蛇がどうした!?!」

陽明が男に聞く。

「先ほど入りました情報によりますと、

どうやら響の里と手を組んだそうです」

「響里と!?!」

「ええ」

「そうか…」

「陽明様?…」

陽明は男の方を見る。

「今の蛇の頭は誰だかわかるか?」

「噂によりますと若い娘とか…」

「若い娘!?!」

陽明が男に聞き返すと男は頷く。

「どうやら…蛇夜シヤヤの右腕だった、あの娘らしく…」

陽明はそっと微笑む。

「月夜美の姫か…」

男が頷く。

「陽明様…如何致しましょう?」

「放っておけ…」

「え!?!」

「好きにさせておやり?」

「しかし、あの娘は…蛇夜を随分慕っておりますた…」

「…」

「いずれ再び、我らに牙を向く可能性が…」

「…その時はまた、何らかの方法で手を打てばいいだろ？」

「しかし…」

陽明は男の方を見る。

「私は見てみたいのだよ…」

不思議そうな顔をする男を見ながら、

陽明は再び笑みを浮かばせる。

「あの子がこれからどんな生きざま（里）を見せるのか…」

「…」

「我々はしばし、これからの蛇を見守るわけではないか」

「…わかりました」

男は陽明に深く礼をする。

魔喇の里。

門前。

「白様その子は？」

リリンが白生に聞く。

白生は笑みを浮かばせながら言う。

「名はキララ…私の大切な友（愛狐）だ」

そう言いながら白生はキララの頭を撫でる。

「この前の戦で大分無理をさせてしまったね…」

今までずっと治療を行っていたの…」

「怪我したの？」

リリンが言うと白生はそつと頷き、

辛そうに言った。

「ホントに悪いことをした……」

「でももう大丈夫なんですよ？」

リリンはニコニコしながら言った。

「…」

そんなリリンを見て白生はまた微笑み、頷いた。

「…リリンも仲良くしてやってくれる？」

白生がそう言うのとリリンは元気良く頷いた。

そんなリリンの視線に腰を下ろし、キララをリリンに手渡す。

リリンは嬉しそうにキララを抱く。

白生はそんなリリンをみてまた微笑み頭を撫でた。

そして立ち上がり少し真面目な顔をする。

「白生さん…」

そんな白生を見て奏森が一言、呟いた。

白生もそんな彼女をみてそっと頷き言った。

「椿は？」

「彼や他の皆は復旧作業を行っております…見送りは私一人です」

「そうか…」

「…行かれるのですね」

奏森がそう言うのと白生はまた頷いた。

「…お気をつけて」

奏森はそう言うのと深く頭を下げた。

「奏森…後は頼む…」

白生は奏森にそう言い渡し里を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8463m/>

---

神魔国物語

2010年10月9日00時33分発行